

昭和51年5月9日第三種郵便物認可 昭和55年10月1日発行（毎月一回発行） ISSN 0385-5457

ヒマラヤ

No.107

●特集 ヒマラヤの祭り PART2



1980 OCT.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1981年ヒララヤ登山学校隊員募集

——ナンダ・カート (6611m) ——

H A Jでは1人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来四度にわたって延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統括のもとに、安全確実を第一にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の修得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしており、単なるバック登山とは全く異なっています。

81年度は、ガルワールヒマラヤの名峰ナンダ・カート(6,611m)にて実施する予定であります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目 的 ①ナンダ・カート(6,611m)登頂
②ヒマラヤ登山の基礎習得
- 時 期 1981年9月13日～10月12日
29日間(BC以上の登山期間15日)
- 負担金 69万円
- 定 員 20名(申込順)
インストラクター4名(ドクター含む)
- 申込み 1980年12月末までに下記宛申込みこと
(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会
TEL 03-367-8521

※ナンダ・カートの詳細については本誌22ページを御覧下さい。

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙の言葉

森 田 千 里

モンスーンで荒れるマナリの町を出て8日目、ラバと共に、北インド、ザンスカールの荒涼とした岩の世界を見た、南をふりかえると、ゴンボ・ランジュンの岩峰が、雲をさえぎっている。岩とホコリとオアシスの旅のはじまりであった。

ヒマラヤ No.107

1. ヒマラヤ放談 ————— 関 章 司
4. ヒマラヤニュース<地域・トピックス・インフォメーション・新刊>
8. 特 集 ヒマラヤの祭り・PART 2 ————— 雁部貞夫・寺田鎮子
17. 連 載 トレッキングで登れる山①<チュルー西峰> 片 岡 邦 夫
20. 遠 征 学 入 門①⑦ ————— 清 水 澄
22. ナンダ・カート

※ヒマラヤ閑話は今月号に限り、休載させていただきます。

ヒマラヤ放談

関章司氏、遠征歴20年、遠征通算7回。『仕事ばかりしているような奴は好きじゃない』と愉快なことをおっしゃるが、日本でもピカーといわれる精神病院、群馬県三枚橋病院の副院長である。適当にはぐらかしながらも、話はまっとうで実に興味深い。そして古き良き時代のヒマラヤ話から、沙漠で拘留されたハナシまで、痛快無比のヒマラヤ談議を、秋の夜長にお届けする。



関 章司

●ドクターは遠征のための方便？

——「精神医学から見たヒマラヤ遠征」というようなことを、噛みくだいてお話しただけだとおもいますが……。

関 いや、こりゃまいったな。精神医学なんていったって、僕はどうもねえ。だいたいあまりいい医者じゃないですよ、僕なんか(笑)。

——でも副院長先生だし(笑)。

関 もともと精神科の医者になろうなんて気はまったくなかったんです。そもそも医者になろうとしたのは「山へ行きやすかろう」と考えたからなんで、山登りのために医者になったようなものだ。最初は法学部の学生でしたから。

——法学部ですか？

関 東大の法科を終えたあと群馬大学の医学部に入りなおしたんです。やたらと長い間学生やってましたよ。どうせ医者になるんなら遠征に役立つ外科にでもなろうと思ったんだけど、どこでどうまちがえたか精神科の医者になってしまった。

——そうすると山は東大時代に始められたんですね。

関 ええ、昭和30～35年頃にかけて東大の山岳部にいました。

——東大の場合はスキー山岳部っていうんでしょう？

関 正式にはそういう名称です。

——あそこはバチッとした指導カリキュラムが組まれていて、現役学生はそれにはずれたことはできない厳しい所だと聞いたことがあります。

関 いや、そんなことはない。あれはね、滝谷で遭難したあと、反省会で出てきたことなんで、僕らの頃はそんなことはなかった。適当にやりましたよ。

——東大でバルトロカンリに行かれたのは昭和38年ですね。

関 そう、そんな頃かな。当時、清水建設にいた先輩がパキスタンでダム工事をやっていた。この人が給料をルビーでもらってたんだけど、そのルビーの使い道がないというので、東大で遠征やってその金を使ったらどうかという話になった。最初はバツラを計画したんだけど、これは実現しなかった。

——かわりにバルトロ・カンリへ行かれた。

関 そうです。

——それから延々と続きますね。

関 そのあとがキンヤン・キッシュで、この時の隊長は今のここの院長ですよ。東大の先輩ですから。えーと、それから群馬芳山のシャカルペーに行って、そのあとまた東大でチューレンヒマール、それからJACのナンダ・デヴィ、学生部のドンナギリ、一昨年のここの岳連(群馬)のダウラギリ。数だけはむやみやたらといってるけど、頂上にはひとつも立っていない(笑)。

●隣人は鎖につながれて……

—— 最初に行かれた頃と今とでは隔世の感があるでしょうね。

関 カラコルムは最近行ってないから、逆に今の様子がわからないけど、ネパールに関しては、71年に行った時、あまりの変りように愕然としましたよ。その前に行ったのがバルトロの帰りに寄った時で63年だけど、この時なんかカトマンズにタクシーが3台しかなかった。それもボロクソのジープで、ポーターがインドからかついできたというシロモノですよ。

—— ばらばらに分解して？

関 ええ、それをカトマンズで組み立てるんだけど、アクセルなんか一度踏んだらもう戻らない。手でひっぱって戻すわけ。それをまた遠征隊がフルに使うものだから、隊が引きあげる頃にはぶっこわれてしまう。街の中にも電気なんかなくて、夜は真暗です。でも神原さんなんか、あの当時からカトマンズにいたし、あとコロンボプランの人たちが何人かいたかな。

—— じゃ当時と比べて「人」も変わったでしょうね。

関 いや、人はそう変ってないと思う。僕は今も昔もネパールの人が好きです。パキスタンの人はどうもあまり馴染めないな。親切にしてもらうこともありますけど、それでもなんとなくしっくりしないんだな。

—— それは皆云ってますね。ただ、逆にパキスタンのそういうところが好きだという人もいますけど……。

関 パキスタンでは兵隊に連行されたことがあるんですよ。カイバル峠の下に鉄砲作ってる村があるんです。あれは何と云ったかな、バストゥー族の村で、その辺の鍛冶屋がピストルを作って、誰でも自由に買える。僕もピストルを買おうかと思ったけど、どうせ日本には持ち込めないから、かわりに大きなナイフを買った。で、それを町の中でブラブラ持ち歩いてたら、兵隊につかまっちゃった。つかまったらいいけど、言葉がぜんぜん通じない。僕もウルドゥー語なら多少は話せるけど、相手はバストゥー語しか話さない。結局わけ

もわからず兵営の前の柱につながれちゃったんです。

—— また、えらいことになりましたね。

関 しばらくして、どこかへ護送するということになって、機関銃と剣付鉄砲に囲まれて軍用トラックに乗せられた。煌々と月の照る晩でね、まさに「月の沙漠」を走り出した。どこへつれてかれるのやら、さっぱりわからない。着いた所が、ボリスの派出所みたいな所で、何だかわけのわからない書類を持ってきて「これにサインしろ。」と云う。サインしろったって、何書いてあるのやらわからない。でも、もうめんどくさくなってサインしたら、今度はベジャワールのホテルにつれてってくれた。ボーイが寄ってきて「どうした、どうした!？」なんて聞くけど、こっちが聞きたいくらいだ。でも、ボーイさんたち親切にしてくれましたよ。

—— とにかく、釈放はされたんですね。

関 いや、その晩も警察が見張っててね。朝になったら裁判所につれてかれた。裁判所の中に入ったら、隣に鎖につながれた男がいたりして、もうびっくりしちゃってね(笑)。裁判官が問題のナイフを持って「こういうものは持ってちゃいけないんだ。ライセンスが必要なんだ。今、ここで書いてあげるから」……それでやっと釈放された。

—— ひと騒動ですね(笑)。

●山ヤは分裂気質が多い

—— 噂では先生は隊付ドクターとして遠征に行っても、あんまり医者らしくないとか……。

関 ええ、関係ないことばかりしている。花を採りに行ったり、蝶々を追いかけたり、ポーターとふざけてたり……。だからナンダ・デヴィの時リエゾンに云われましたよ。「ドクター ノービジネス バットゥ ヴェリイ ビジュー」なんてね(笑)。

—— 群馬の人の話だと、あまり薬も持ってかないんですって？

関 そんなことないよ。ちゃんと持ってきますよ。もっとも田中先生(田中壮佑氏)に比べたら3分の1も持ってかないかなあ。

—— ドクターの立場で遠征隊員を見ていて、

何かお感じになることはありますか？

関 特に一般社会人と変わることはないと思いますよ。皆しっかりしている。もっとも私自身、仕事を放って山にうつつを抜かしてきたし、またわき目もふらずに仕事ばかりしてる人ってあまり好きじゃないから、山ヤさんには点が甘くなっちゃうのかもしれないけど。

—— そうすると、山ヤに共通した独特の個性みたいなものって、特にないわけですね。

関 そうですね。もっとも私の参加した隊というのは、みんな仲間うちでの和気あいあいとした隊で、たとえば国際隊みたいな、ああいう性格の隊を知らないからなのかもしれないけど……。

—— 山ヤは、躁鬱気質が多いとかって聞いたことがありますか……。

関 いや、人間を分裂気質と躁鬱気質に分けるとすれば、山ヤはどちらかというと分裂気質のほうが多いと思いますよ。表面的には物静かで傷つきやすく、すぐ抑鬱的になっちゃうように見える面もあるから、それを躁鬱的と云ったのかもしれないですね。盾環気質というのがあって、これは分類すると躁鬱に近いんだけど、このタイプは表面上人あたりがよくて、社交的なんです。こういう人も登山する人の中に結構いるけど、でも割合としては少ないですね。例えば、あなたを見てみるとやはり分裂気質でしょう。書物を友とし、自然を友とし、というようなタイプですね。これはどちらかというと分裂気質なんです。

—— なるほど。

関 そもそも何故山を始めたのかということになると、現実社会からの逃避といったような傾向が割とあるんですね。煩いの多い世間から逃れて静かな自然に親しみたいというような。

—— そうですね。やっているうちにどこそこの壁の第何登だとかってというような野心も出てくるけど、最初からそういう野心を持って山を始める人っていないような気がしますね。

関 そうでしょう。発端は違うものなんですよ。

●ナンダ・デヴィのミステリー

—— これからもまだあちこちの山へ出かけられるんでしょう？

関 行きたいですねえ。ただ、最近あんまり病院のほうをあけてばかりもいられないようになってきてね。今までは「行かせてくれ」って両手あわせて行っちゃったけど、どうも最近はそうもいかない。

—— さすがの先生もそろそろ……。

関 ただ、行くとすれば8,000メートルとか、そういう山じゃなくて、小さくてもいいから、自分で頂上に立てるような山に行きたいですね。ヒマチャール・ブラディッシュとか、ああいうところの山ならまだ僕でも立てるんじゃないかという気がする。何せ我慢じゃないけど一度も頂上に立ってないから、どうしても一度立ってみたいんだよ。

—— 今までだってその気になれば立てたんじゃないですか。ドクターとして行ってたからでしょう。

関 いや、初めのうちは登はん要員として行ってサミッターを狙ってたんだけどね。

—— いつ頃から、ドクターとして行くようになられたんですか？

関 えーと、71年のチューレン・ヒマールからだ。あの時だって上へ行きたかったんだけど、鹿野君（鹿野勝彦氏）が「ダメッ、関さんは。頭のはっきりしてる所にいてくれなきゃ」なんておかしなこと云いだすもんだから（笑）。

—— そのあとのナンダ・デヴィがまた鹿野隊長ですね（笑）。

関 そうそう。……ナンダ・デヴィではおもしろいことがあってね。CIAが頂上にミサイル探知器を作ったとかって噂があって、氷河に電話線が落ちてたりしたんだ。あと高見ちゃん（高見和成氏）が西峰の頂上で通信テープ、ほら、あのポツポツ穴のあいたテープ、あれをひろってきてね。「俺たちは核で汚染されちゃったんじゃないか」なんて云って皆騒いでね（笑）。

—— リン・ガンガは汚染されちゃったかな。私もあそこの水は飲んでますよ。

関 じゃ危ないかな（笑）。

—— そうかもしれませんね（笑）。どうもいろいろと楽しいお話をありがとうございました。

（インタビュー構成：角田不二）

地域ニュース

《パキスタン》

ラワルピンディのエージェント

現在ネパールやインドの登山では殆どの隊が何らかの形で旅行エージェントを使うようになってきているが、パキスタンの場合は比較的そういうケースが少なかった。しかし、最近カラコルムやヒンドークシュにやって来る西洋の登山隊は、殆どがエージェントを使っているという。わずらわしい渉外業務などはみなエージェントに任せ、もっぱら登山のことにのみ頭を使うというのが、彼ら流のやり方のようなのである。最近パキスタンより帰国した某氏の話によると、KARAKORMU TOURのMr. HAYATが観光省、PIAなどに顔が広く、仕事もよくできて便利だとのこと。同社では通関業務から保険契約、ジープの手配、ポーターアレンジに至る一切のトランスポート業務、さらには事前の登山許可取得手続にいたるまで遠征のすべてを受請って、5～10人の隊をUS\$400とのことである。日本人の場合、許可取得に関しては日山協の問題等もあるが、西洋のアルピニストは帰りがけにエージェントに立ち寄り「次はこの山をやりたいから……」と一言云うだけで、すべてを済ませてしまうという。カラコルムも今や麓のことでアレコレ悩む時代は終りつつあるらしい。

《インド》

IMFこの秋新事務所へ

インド登山財団(IMF)の事務所は、これまで国防省の中にあって、その粗末さから「堀立小屋」などと云われて評判が悪かったが、この秋いよいよ新築の事務所に移ることとなった。

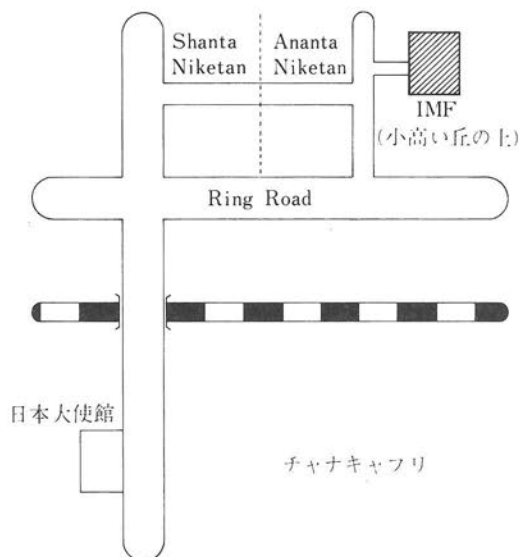
新事務所はニューデリーと空港の中間付近にあり、コンノートサーカスから行く場合、チャナキャブリを通り、日本大使館を過ぎた先の広い通り(Ring Road)を越えてから右へ入ると、前方の小高い丘の上にある。建物は3階建ての鉄筋コンクリート造りで、大きなホールや部屋があり、大

小集会から宿泊までできるようである。事務局のムンシー・ラム氏の話では9月上旬には完成することのこと。

また、我国の立山の人工岩場を参考にして敷地内にロックガーデンを作る計画も進んでおり、その完成が待たれる。

《住所》Near Ram Lal Anand College Anand
Niketan Road New-Delhi 110021

TEL : 671211



ザンスカール最近の情勢

この夏、ザンスカールに入った人の話によると、カルギルからパドンまでトラックが入っており、途中ジュルドゥーで1泊して2日行程とのことである。一方のマナリ方面はダルシャまでバスが入っている。

諸物価の値上りはザンスカールにも波及しており、特に中心地パドンでは馬の雇用が1頭1日70ルピー、ただし交渉で多少は安くなる。周辺部はずっと安く35ルピー。ガイドは公定で1人1日70ルピーとのことである。

トピックス

『ヒマラヤ』合本を製作

「ヒマラヤ」の合本は、かつて60号まで作りましたが、このほど①61～80号及び②81～100号と2冊分の合本を製作します。堅牢な装幀で永久保存用です。御希望の方は①、②のいずれかを明記の上、9月30日までに下記宛申し込んで下さい。①、②とも8,000円です。

申込み 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23
-1 淀橋食糧ビル506号 日本ヒマラヤ協会

ケダルナート隊出発

HAJ登山学校ケダルナート隊は、8月16～17日にかけて隊荷梱包を済ませ、9月4日、まず2名の先発隊（尾形隊長、北出隊員）が成田よりインドに向った。両名はニューデリーで関隊員と合流し、諸準備を行なった後、一足早く入山し9月15日タポバン（4,320m）にBC建設。ABCの位置を決定しルート偵察を行なう予定である。

本隊は9月13日に出発し、20日BC入り。約2週間の登山期間でケダルナート（6,940m）及びケダルナート・ドーム（6,830m）の登頂をめざす。

なお、内田隊長と南副隊長は、突発的な家庭内の事情により参加をとりやめ、急遽尾形インストラクターが隊長に就任した。また新たに山田昇、角田不二（両名ともカンチェンジュンガ隊員）がインストラクターとして参加することとなった。

20:30～21:00 HAJの現状報告

＜申込み＞〒852 長崎市滑石2-19-9

勝山良三 TEL 0958756-1592

※会費、飲食代として500円（当日いただきます）

東京定例集会 — 9.26

9月の東京集会は、最近カラコルムのジュトマウ・サール（7,330m）の初登頂に成功して帰って来た杉本会員を囲んで、肩のこらないカラコルム談議を催す予定です。ふるって御参加下さい。

◇日時 9月26日（金）午後6時30分より

◇場所 HAJルーム

海外登山研究会（都岳連）

東京都山岳連盟では下記のとおり恒例の海外登山研究会を開催します。

＜期日＞ 10月25日（土）～26日（日）

＜場所＞ オリンピック青少年センター 渋谷区代々木神園町3-1 TEL 03-467-7201
（小田急線参宮橋下車徒歩5分）

＜費用＞ 岳連加盟団体員 5,000円

未加盟の方 5,500円

＜内容＞ 中国登山の現状と手続き

トレッキングで登れる山について

登山隊報告（ネパール、インド、パキスタン）

講演 水野 勉氏

インフォメーション

長崎ヒマラヤ集会 — 10.27

＜日時＞ 1980年10月27日（月）19:00～21:00

＜場所＞ 長崎市民会館（予定）

＜日程と内容＞

19:00～19:10 開会、参加者紹介

19:10～20:00 ヒマラヤ最新情報（インド、ネパール、パキスタン）

20:00～20:30 8mmカンチェンジュンガへのトレッキング

新刊図書一覧

①和田幸信、「シルクロード独り旅 — 古代のロマン・廃墟への巡礼 —」、昭和出版、1980・7、285p、1,500円。

②金子隆、「白いサンゴ礁の楽園 — モルディブ —」、白馬出版、1980・8、182p、870円。

③中央民族学院語文学系＜民族文学編選組＞編、「少数民族短編小説篇1949-1979」、中国四川省成都、四川民族出版社、1979・12、558p、1.45元＝870円、（中国語版。初版34,000部）。

- ④八田幸雄、「ヒマラヤに神をもとめて — ブータン・西チベット —」、東洋文化出版、1980・7、310p、2,200円。
- ⑤リュセッ・ブルノア著／長沢和俊・伊藤健司・訳、「シルクロード — 「絹」文化の起源をさぐる —」、河出書房新社、1980・7、363p、IX、2,300円。
- ⑥森本公誠、「イブソ=ハルドゥーン」、講談社、1980・7、404p、7p。1,500円、(人類の知の遺産、第22巻)。
- ⑦生野善応、「ビルマ上座部仏教史」、山喜房佛書林、1980・5、19+28+405+10p、8,500円。
- ⑧角田直美・麻井玖美／共著、「インド紀行」、保育社、1980・8、151p、430円、(カラーブックス508)。
- ⑨佐治芳彦、「謎のシルクロード」、徳間書店、1980・7、262p、980円。
- ⑩A・Z・ヤマニー著／真田芳憲・訳、「イスラム法と現代の諸問題」、中央大学出版部、1980・6、163p、+4p、900円。
- ⑪リック・リッジウェイ著／真野明裕・訳、「ちょっとエベレストまで」、講談社、1980・7、309p、1,400円。
- ⑫榎一雄・編、「敦煌の歴史」、大東出版社、1980・7、XII+484p、6,000円、(講座・敦煌 第2巻)
- ⑬田中達彦、「Srilanka — 不思議世界(写真集)」、著者自費出版、1980・1、56葉、

- 1,200円、(著者 東京都小金井市東町4-17-12-201)。
- ⑭国際仏教徒協会・編、「現代チベット語教本」永田文昌堂、1980・、2,000円。
- ⑮前田常作、「マンダラの光(前田常作画集)」、佼成出版社、1980・、A3版・240p、110,000円、(限定500部)。
- ⑯松本和夫、写真・衣斐啓、「カラコルム紀行」、佼成出版社、1980・、980円。
- ⑰井上靖・岡崎敬／NHK取材班、「幻の楼蘭・黒水城」、日本放送出版協会、1980・8、234p、1,700円。
- ⑱陳舜臣／陳立人・写真、「西域巡礼」、平凡社、1980・8、204p、2,300円。
- ⑲津田元一郎、「インドの心」、日本評論社、1980・8、266p、1,500円、(日評選書)。
- ⑳立岡洋三、「八ヶ岳遙か — 野辺山だよりII —」、耕土社、1980・7、233p、1,500円。
- ㉑植村直己、「冒険と人生」、聖教新聞社、1980・2、135p、250円、(文化教養シリーズ3)。
- ㉒石岡繁男、「屏風岩登はん記」、中央公論社、1980・8、247p、320円、(中公文庫M132)。
- ㉓中国登山隊・《体育報》編集部・編、Planting Five-Star Flag on Mt. Tumor. 北京、外文出版社、1979、103p、写真集(英文)、邦価3,000円、(1977年遠征の報告書、中国語版もあり、双方とも少数しか発行されず)。

(資料：藤井 毅)

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作づつ掲載する予定であります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

《規定》

- (1)モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3)未発表であること。

(4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真(例：カラバタからのエベレスト)などは御遠慮下さい。

《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

H A J 「ヒマラヤ」編集部

インドヒマラヤ研究集会

～IMF総裁H.C.サリーン氏来日決定～

先号で延期をお知らせしましたインド・ヒマラヤ研究会については、その後、サリーン氏との打合わせを続けておりましたが、このほど下記のように来日が決定し、研究会を開催することになりました。

氏は、中央政府の閣僚もつとめたことがあり、現ガンディー首相の信頼が厚く、現在アッサム州知事という重職にあります。

御承知のように、アッサムの政情はひじょうに多難であり、氏の日程は多忙を極めておりますが、今回のH A Jの招請にあたっては、困難な情況にかかわらずこたえてくれた次第です。

インド登山財団（IMF）は、オフィスを新築移転し、今後益々発展すると考えられるインド・ヒマラヤにおける登山に対処しようと努めております。

その総裁をつとめるサリーンの発言、わが国登山界に対するアドバイス・要望等は極めて注目されます。

会員の方々の積極的な御参加を期待します。

== * == * == 記 == * == * ==

1. 趣 旨 IMF総裁H・C・サリーン氏を囲んでインド・ヒマラヤ事情、インド登山界、登山規則等について正しい認識を深め、かつ、わが国登山者の要望等を伝えることを目的として開催する。
2. 主 催 日本ヒマラヤ協会（H A J）
3. 後 援 インド大使館、インド政府観光局、
エアーインディア
4. 期 日 昭和55年10月18日～10月23日
5. 内 容
 - 1) 講師 ○インド登山財団（Indian Mountaineering Foundation IMF）
総裁H・C・Sarin氏
○H A Jインド・ヒマラヤ精通者
 - 2) 日程

◇京都会場 — 10月19日(日) 18時～20時
30分 京都国際ホテル会議室(京都市
中央区油小路2条下ル 電話 075-222
-1111)

◇東京会場 ― 10月21日(火) 18時～20時
30分 東京海洋会館会議室(東京都新
宿区百人町2-27 電話 03-813-6211)

※場合によっては期日が変更になるかもしれません。申込みのあった方には後日確かな期日をお知らせします。

3) 順序

◇開 会・歓迎の辞

◇あいさつ H.C.サリーン氏

◇講演 H.C.サリーン氏

「インド・ヒマラヤとインド登山事情」

◇記 録(映画・スライド)

「インド・ヒマラヤの山々とその登はん」

◇質疑応答 H.C.サリーン氏、他

◇閉 会

6. 会 费

- 1) 研究会 1,500 円(会費外 2,000 円)
2) レセプシ ョ ン 6,000 円
7. その他
- 1) 各会場とも通訳を配置します。
2) 各会場においてヒマラヤ資料の特別頒布を行いません。
8. 参加申し込み
- 各会場とも 40 名で申込みを打ち切りますので
早めに申しこんで下さい。
- ※申込期限 昭和 55 年 9 月 30 日
※申込先 日本ヒマラヤ協会事務局
- 〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

◎申込みなく当日の参加はお断りします。

申込みにあたっては、住所・氏名・所属団体名・参加会場を明記してハガキをお願いします。

日本ヒマラヤ会議開催予告

福岡・高知

◎福岡会場

《日時》1980年10月26日(日) 10:00～16:00

《場所》電気ビル7号会議室 福岡市中央区渡辺通2-1-82 TEL092-781-0685

《日程と内容》

10:00～10:15 受付

10:15～10:30 開会、参加者紹介

10:30～12:30 トレッキングで登れる山、6,500m級の山の諸問題

12:30～13:30 昼食

13:30～15:00 ヒマラヤ最新情報(インド、ネパール、パキスタン)

15:00～15:30 ヒマラヤ登山の事故——最近10年間の傾向と対策

15:30～16:00 登山報告——カラコルムのジュトマウ・サール初登頂(東京志岳会)を予定

16:00 閉会

《参加》この会議の主旨に関心を有する者で所属、経験を問わない(50名)。

《参加費》2,000円(資料代含む)

《申込み》〒810 福岡市東区香椎団地21棟26号 倉智清司 TEL 092-662-2876

◎高知会場

《日時》1980年10月25日(土) 13:00～16:00

《場所》高知電機ビル



▲仙台会場

高知本町4-1

《日程と内容》

13:00～13:15 受付

13:15～13:30 開会、参加者紹介

13:30～15:00 トレッキングで登れる山、6,500m級の山の諸問題

15:00～16:00 ヒマラヤ最新情報

16:00 閉会

《参加》この会議の主旨に関心を有する者で所属、経験を問わない(50名)。

《参加費》1,000円(資料代含む)

訂正

「遠征学入門」第10回(本誌No.100, 21ページ)の「……高体連の先生方を中心として……」の部分は正確ではありませんでしたので取消します。
(西郡光昭)

カンチュンジュンガ隊に御協力を!!

昨今のネパールではシェルパ・ポーターへの支給品が大きな数量を必要とするようになってきており、カンチ隊も苦慮しております。使わなくなったり、押入れの隅に入ってる登山用具・衣類等をお持ちの方、御寄贈いただけたら幸いです。よろしくお願い申し上げます。

※例えば……山靴、キャラバンシューズ、ニッカーズボン、ポンチョ、ヤッケ、オーバー手袋、毛の手袋、靴下、etc……。

《連絡先》HAJ事務局 03-687-8521

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

HIMALAYAN FESTIVALS

特集

祭

ネパール・パキスタン



インドラ祭で踊る鬼

ネパールの祭

寺田 鎮子

私の手許に「Nepal Festivals」という小冊子があります。ネパール政府観光局でまとめたもので、主な祭を月毎に並べて解説してあります。手に入り易いものですから、お持ちの方も多いことでしょう。さてそこで、ネパールの祭というテーマで書こうとすると、まず考えつくのは、このパンフレットを翻訳して適当にまとめれば、ということですが、少しでもネパールの文化について学んだことのある人は誰でも経験するように、それほど簡単ではないらしいと気がつきます。

たしかに、私はこれまで何回かネパールに行って、祭や年中行事や民間説話などの観察や資料集めなどをしてきましたが、ネパールの祭を語れといわれますと、ただ途方にくれる思いがします。

問題は大きく分ければ、二つあります。まず一方には「ネパール」があり、もう一方には「祭」があります。このどちらも、一すじ縄では行かぬ

相手なのです。

私たちの日本のように単一民族といわれている国でも、一歩文化の源を辿る道に踏み込めば、どんなに優れた学者たちが議論を重ねても、問題は藪の中、という感がなきにしもありませんが、ネパールの場合は、それ以上の困難が待ちかまえています。ネパールとは何なのか、それが判らなければ、祭を語ることもできません。

と言って足踏みをしていたは何も始まりませんので、とりあえず常識的な理解を試みれば、ネパール文化を構成する文化の系統は大きく分けて、アーリア的なインド文化（ラマ教でない仏教文化も便宜上含む、アーリア以前のインド原住民の文化）、ヒマラヤ・チベットの古い民族文化、さらに新しくチベットで成立したラマ教的なもの等が考えられます。ネパールの祭を見る場合には、まず上の四つの伝統のどれに属するものかに注目し



《写真》①ダイサンの10日
め、生命の象徴である大麦の
茅を束にして髪に飾る。②イ
ンドラ祭の時に出るクマリ(処
女神)の山車の巡行。

くりひろげられる、華やかで、心浮き立つ行事の数々が祭というものであり、日常的な生活のリズムを破り、生命感を昂揚させる特別な時間であったのです。

しかし、じつは祭の本質はそこにはありません。まつり、

という言葉のもとが、まつろうという古い言葉であることを見れば判るように、祭とは本来、神の来臨をまち、一定の場に迎えてその意志をうかがったり、祝福や助力を期待したりするための神事なのです。そのために、神の喜ぶ行為やごちそうを用意して待つことも、重要な手段でありました。

こうした本来の祭は、その後にくりひろげられる、いわば祝賀会ともいうべき祭礼の陰にかくれて、一般の人々の関心からはずれて来るようになりましたが、神を祀る人々にとっては、静かではあるが意味の深いものであったのです。

まつり、という言葉を理解するために、日本の場合について考えてみましたが、ネパールやインドでも、同じような現象を見ることができます。ことに大都市や有名な聖地で行われる祭は、巨大な山車や、作り物の引き回し、扮装した人々の行列、花火や競馬などの見せ物がくりひろげられ、娯楽の多い現地の人々にとって、たまさかの生活の彩りとなっているようです。

しかし、ネパールでもインドでも、はっきり現代の日本とちがう点があります。それは、この人々のあいだでは、神々が生きて畏れられ、敬われていることです。ここでは、人間の力を超えた自然の力、超自然の存在がたしかに人々の心のなかで生きており、そうした力を慰めたり、助力を得たりするために、本来の意味における祭が、有効性を保持しつつ、日常的に行われています。

インド・ヒマラヤ世界は、まさにこうした祭の



なければなりません、それも簡単には断定できないものも多いのです。

次に、祭とは何かということになります。ふつう私たちがこの言葉から思い浮べる情景は、威勢のよい若者たちにかつがれ、上へ下へともまれる神輿の渡御、きらびやかな山車や屋台の行列、そろいの浴衣に花笠やうちわをもって踊る人々、それを見物する人、人、の波……。こうした戸外に

宝庫とも、優秀な保存庫ともいえるでしょう。そこにはあらゆる段階や形式の祭式が見られます。ヒマラヤのひだにしがみついているような村々へのこる、非常に原始的な呪術的祭儀から、厳格な方式と祭詞を伴うバラモン正統派のヴェーダ祭式の残存まで、長い歴史的推移のなかで吸収してきた土着的伝承を加えつつ、存在しているのです。

このような豊富な現実について、短い紙数ではとても語り切れないのですが、とりあえず外国人の私たちの眼にふれやすい祭を例にとって、この地域の複雑な祭式儀礼の世界に、少しでも踏み入ってみることにしましょう。

まず、「Nepal Festivals」及びネパール文による「私たちの祭」という資料から、主な祭をあげてみましょう。

vaisākha 月: navavarṣa (新年)、bisket-jātrā (世界の柱祭)、mātātīrtha snan (母の河岸での沐浴)、macchenaranāthko ratha jātrā (マッチェンドラナートの山車巡行)、buddha jayanti (ブッダ誕生日)

jestha 月: sithī cād (六日目の祭=雨期の開始)、daśaharā (十の罪惡の破壊者)

śrāvana 月: karkat saṅkranti (巨蟹宮の第一日)、nāga pañcamī (蛇神の五日目)、ghaṇṭā

karna (ガンタカルナ羅刹)、

bhādra 月: gāī jātrā (牛の行進)、kṛṣṇa astmī (クリシュナ誕生の八日目)、pañca dān (五つの布施=仏教徒の祭)、tīj vrata (三日目の断食=女性の潔斎日)、indrajātrā (インドラ巡行)

āśvin 月: sohra śrāddha (十六日の祖霊祭) dasain (十日目) 又は durgapūjā (ドゥルガ供養)

kārtika 月: tihār (ティハール=暦の記念日) divalī (灯明祭=ラクシュミーの祭)、haribodhani ekadasi (ヴィシュヌの目覚めの11日目)

mārga 月: vivaha pañcamī (シーターとラーマの結婚)、dhānya pūrṇimā (新米の満月)

māgha 月: māgha saṅkranti (摩羯宮の第一日) śrī pañcamī (シュリーの五日目)

phālguna 月: śivarātri (シヴァの夜)、holī (ホーリー=穀物の実り)

caitra 月: ghode jātrā (馬競走)、caitra dasain (チャイトラ月の十日目)、rām navamī (ラーマの九日目)

この一覧表にあげられている祭は、旅行者の眼にふれやすいカトマンズ盆地で主に行われているものがほとんどで、チベット系はもちろん、山岳民族の祭は皆無です。しかし、それはひとまずお

ダイサン
の九日め。
見守る高
官たち。
軍隊の中
庭で水牛
の犠牲が
捧げられ
てい



いておいて、一通り目を通しますと、まず気がつくことは、「祭」、あるいは festival に当る言葉をつけたものが少いことです。そして内容的に言えば、ヒンドゥー的なものが断然多いことですが、他にも仏教関係や、土着の伝統と覚しきものも、いくつか含まれています。特に宗教と関係ないものとしては、天体の運行や農耕に関わる祭日も入っています。これだけを見ても、ネパールの祭や文化の複合的、重層の性格がうかがえると思います。

さて、ここで、ネパール語の「祭」という言葉について考えてみますと、英語の festival と訳せる一般的な呼び方としては、cād-parv とか vrato-tsav という言葉があります。しかし、これを個々の祭の名称として使用することは少いようで、単に何々の日、と呼ぶのがほとんどなのは何故だろうかと考えてしまいますが、結論は出ません。

ただ面白いことには、parv には植物の節目とかものの繋ぎ目という意味があり、中国や日本で祭の時期を「節」と呼ぶのと共通する意識が見られます。cād にはごちそう、宴会という意味がありますから、この合成語には「節供」という訳がぴたりのような気がします。これに対して vrato-tsav にはもう少し厳格な調子があります。vrata とは、本来ヒンドゥー教徒たるものが守るべきさまざまな戒律を指しますから、これは祭のときに守る断食を初めとする沈黙や清浄戒など、「ものいみ」というような意味あいを含むのではないかと思います。

このように、インド世界における祭の精神構造は、季節の節目としての意味と、神迎えとしての意味が重要であることから見れば、日本のそれと似通っているようです。それとも、神々は近代以前の人間達に、どこでも同じ姿を示したのでしょ

うか。

ヒンドゥー的な祭の説明に重点がかかってしまったようですが、ネパールでまず目につくのは、何よりもヒンドゥーの祭であることもたしかでしょう。それはひとつには、ヒンドゥー的な文化をもつバフン、チェトリというグループが、カトマンズでの支配階層としてだけでなく、農民として全国的に居住していることにもよりますが、もう一つは、非アーリアン系の民族の間に、より高い

社会的、経済的位置を獲得するための手段として、ヒンドゥー文化の摂取が行われている、という理由によります。サンスクリット化とよばれるこの現象は、祭の場合にも例外でなく、最近では、ラマ教一色であったシェルバ族も、ヒンドゥーの大祭であるダサインを行うようになったと聞いています。

その他、マガール族の村でのダサインは、川喜田二郎氏の報告にもあり、他の山岳民族の間でもとり入れられていることでしょう。さらに、ダサインだけでなく、いくつかのヒンドゥー的な大きな祭、たとえばディワリーやサラスヴァティーの祭などが広く行われていることは、二、三の報告で見たことがあります。

ただ、こうした場合でも、つねに注意なくではいけないのは、たとえヒンドゥー的な装いをこらしていても、実体は土着の神の祭である例も多いことです。ダサインについて言えば、村によっては水の神の供養であり、ディワリーで崇められるラクシュミー女神が、村では別の土着の女神であったりするのです。

また別の例ですが、タカリー族の場合などはもっと複雑です。彼らは固有のドームという呪的宗教の上に、かつてチベットからラマ教を取り入れましたが、最近では急速にヒンドゥー化しているとのことですから、祭も三層以上の構造をもっているのでしょう。

しかし、こうした趨勢にもかかわらず、シェルバ族をはじめとするチベット系住民の間では、チベット暦にのっとったチベット式祭が変わらずに続けられ、ネワールの仏教徒たちは昔からの仏教式慣習を守り、他の山岳民族たちも、それぞれの伝承と祭式儀礼を伝えています。

もしみなさんが、ネパールを初め、インド各地の山村で祭を見物する機会があるときには、それがどのような伝統に属するものであるか、注意深く見分ける眼を備えておかれると、一層興味深いものとなるでしょう。さらにそのとき、この人々が祭のなかで確めようとしている、人間と宇宙、自然との関わり合いを感じることができれば、すばらしいことと思います。

パキスタンの祭り

雁部 貞夫

特にカフィリスタンの場合

今夏のパキスタンでは、外国人に対してもラマダン（断食月）の規制はきびしかった。ハク首相の「外国人といえども、ラマダン中は、もし必要とするなら、自己の食糧は携行すべし」というお達しが徹底し、ベルシャワールでは、いくつかのホテルの定評ある食堂も夕方まで閉店状態であった。これが約1ヶ月続いたのだから、日本のレストランなら完全に倒産に追い込まれてしまうだろう。ホテル自体も閑散としていた。

ナショナリズムの強化ということだろうが、回教という宗教のもつ、一種のストイックな感じが、ますます強くラマダン中のパキスタン全土をおおっていた。外国人だからといって、ホテルのバーでビールをちょっと一杯というわけにはいかない。空港でも、ウィスキーのボトルを見つけられると、この国ではご法度だよとおこごとを頂戴するといった具合。ナショナリズムといえば、道路標示なども数年前までは英語だったものが、ウルドゥ語に改められている所が多かった。

今年のラマダンは、8月11日の夜終った。もっとも、地方は11日だが、都市部は一日おくれで12日であった。本誌6月号で、イード・ウル・フィトル（ラマダン明けの祭）についていくらか触れたので、今年見てきたばかりのその実況をしばらく記してみる。

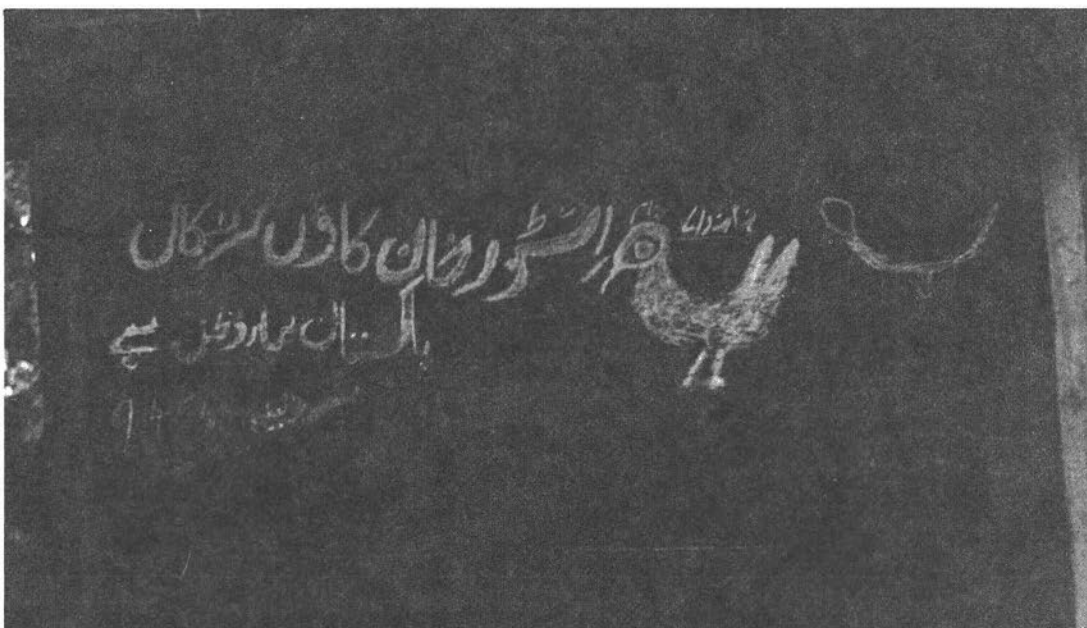
法顯伝を携え、そのルートを追っていた私は、しばらく上部スワートのカラームの町の北にある森林局宿舎に滞在していた。ヒマラヤ杉に囲まれ、すぐ東にマンキャール峰をのぞむ閑静なバンガローである。

古くからの友人のカリッド・カーン君（マルダンの弁護士）と、8月初めからガンダーラ旧跡のそこここを訪ね歩いていたのである。8月11日に私達は、カラームの宿舎を引き払い、カリッド君の郷里ミヤ・イサ村（マルダン北西）へ戻ることにした。もし、今夕にでも月が上れば、断食月は終わるので、どうしても夕方に予定されている最後の礼拝の時刻に間に合せたいというわけである。

カリッド君愛用のトヨタ67年型乗用車は、ジープ並みの働きぶり、ために我々の行動半径は大いに広がった。クルーは、運転手のボンパール。本名は別にあるのだが、ハッシシなどを吸って、危険な山道を車をすつとばす徒をボンパールと称



◀ ガンダオ（少年の死んだ記念の木彫）



する。カリッド君が大学生の時から世話している
お目付役兼料理人のスーフィ老。それに我々2人
である。

カラムを昼に立ち、マラカンド峠道のスリル
満点のヘアピンカーブを下りきるとマルダンの平
原の入口となる。すでに夕刻近い。街道沿いに多
くの人々が群がり、空を見上げている。もし、最
初に月の出を見つければ、その人は一日だけのヒ
ーローになるということだ。皆こざっぱりした服
を着て、長かったラマダンから解放される時も近
いせいか、ニコニコと挨拶を交している。

夕刻、ミヤ・イサへ着き、カリッド邸（豪壮な
砦のような建物）のそばの村の共有のゲスト・ハ
ウスに到着。いかに親しくなっても、家の内部

へ友人を招き入れることをしないのが、慣いであ
る。外国からの客も、村の友人も、この村の集会
所（ボジュラという）でもてなされる。ボジュラ
は、村の社交、集会の場なので、イギリス統治時
代は無論だが、その後も、時の権力によって、取
りこわされることがしばしばある。ここのボジュ
ラは、水洗トイレ、エアコン付きで居心地がいい。

食事が終って、カリッド君の親類の人々とお茶
を飲んでいると、8時すぎだったろうか2、3発
の照明弾が上がった。月が出たことを公式に認める
合図だという。もし、今日雨でも降っていたらど
うなると聞くと、その場合は一日だけ延期するの
だという。今夜は明日から三日間続くインドの祭
の準備で皆忙しいらしい。

翌12日、もうひとつ別の草ぶき屋根のホジュ
ラでイード第一日の行事があるので朝食後行って
みた。カリッド君の父君が主人役で、次々にやっ
てくる村人たちの祝福を受けている所だった。こ
の老政治家（77才とか）はガンジーの側近とし
て活躍したインド国民会議派の一人で、第二次大
戦中はイギリス当局によって久しく投獄されてい
た由。マルダン地区一帯はパターン人の中でも最
も有力な部族ユスフザイの住地なのだが、ミヤ・
イサの人達は昔から有名な戦士、詩人を輩出して
来たカタック族なのである。

このホジュラにやって来た人々の数は百人ま

カルチャクンド報告会

今春、インド・ガンゴトリの未踏峰カルチャ
クンド（6,632 m）の初登頂に成功した登嶺会
登山隊（本誌前月号に記録を掲載）の報告会が
下記のとおり開催されます。

《日時》 10月7日 午後6時30分

《場所》 渋谷勤労福祉会館

で覚えていたが、それ以上は一日延々と続くというので数えなかったが、恐らく村中の男がやって来たのではないか。お茶をのみ、砂糖菓子を食べて帰ってゆく。庭のテーブルでは、貧しい階層の人々が20人ばかり、羊肉や牛肉を主にしたご馳走を餐応されている。これが、1名イード・ス・サダカ（慈善祭）の由来なのかと私は得心した。コーランにいう、「おお、信ずる者よ。アラーの意に従って施しをなせ。それは汝等回教徒たる者の義務である」と。

明日は村の広場で、競馬やカタック・ダンス（戦士の太刀踊り）のアトラクションがあると滞在をすすめられたが、夕方ペシャワールからカラチへ飛ぶことになっているので、残念乍らイード祭を全部見るわけにはいかなかった。ペシャワールの町の広場にはサーカスの大テントが張っており、この祭は、ひと昔前の日本の正月やお盆の行事に似た雰囲気があった。

さて、カフリスタンの冬の大祭（チョウマ、またはチトリマス）について記そう。その聞き書は、すでにショーンバーグが1935年にノートしている（「異教徒と氷河」参照）。大略は次の通りである。

祭の第一日、男も女も水浴し、着衣を洗う。谷谷はすでに雪に埋っている。（筆者の聞いたところでは、12月21日に始まり31日に終るという）。以後9日間男女は別々にくらす。男たちは山羊小屋へ行くのである。第一日の夕方、多くの村々から集められた3、40頭の山羊がサジゴ

ルへ連れて来られ、そこで血祭に上げられる。（サジゴールとはカフィール人の造物主デザウの下にあって、この世界をとりしきる神の名。またその神殿をもいう。ボンボレット谷では、村の住居から孤立した北側の山腹に現存する）。筆者が4、5年前にそこを訪れたとき、犠牲にされた山羊の角が、おびたしく側らのチナールの大木に掛けてあった。ここは女人禁制の聖域であり、カフィール人の最も神聖な場所である。

ショーンバーグは「山羊が血祭に上げられたとき、杜松の火がともされ、血は火やサジゴールの壁にも振りかけられる。肉は男たちによって、いくつかの山羊小屋へ持って行かれ、食べられる」と記している。この神の庭では歌舞が行われる。

第二日目、男たちはチャパティを作る。これは分割して、サジゴールの聖火に投ぜられ、残りは持参した者が食べる。神との共食という意味が込められているようだ。祭の宗教的部分はこれで終り、以後、カフィール人は、隣人を訪問したり、客にワイン、チーズ、羊の焼き肉をふるまったりして過す。

なお、この祭の主神は、バラマヒン神であり、この神はカブール川下流のチャイラムから馬にのってやって来て、40日間このボンボレット谷にとどまる。健康、富、幸福、作物などを司る重要な神格を持った神である。

先年NHKで放映したフィルムでは、松明をともし、雪を踏んで祭に集る人々を谷の遠くから映したカットが印象的であった。私が一番見た祭儀はこの冬の大祭チョウマなのである。

原稿募集

ニュース ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A Jに対する提言などもお寄せ下さい。

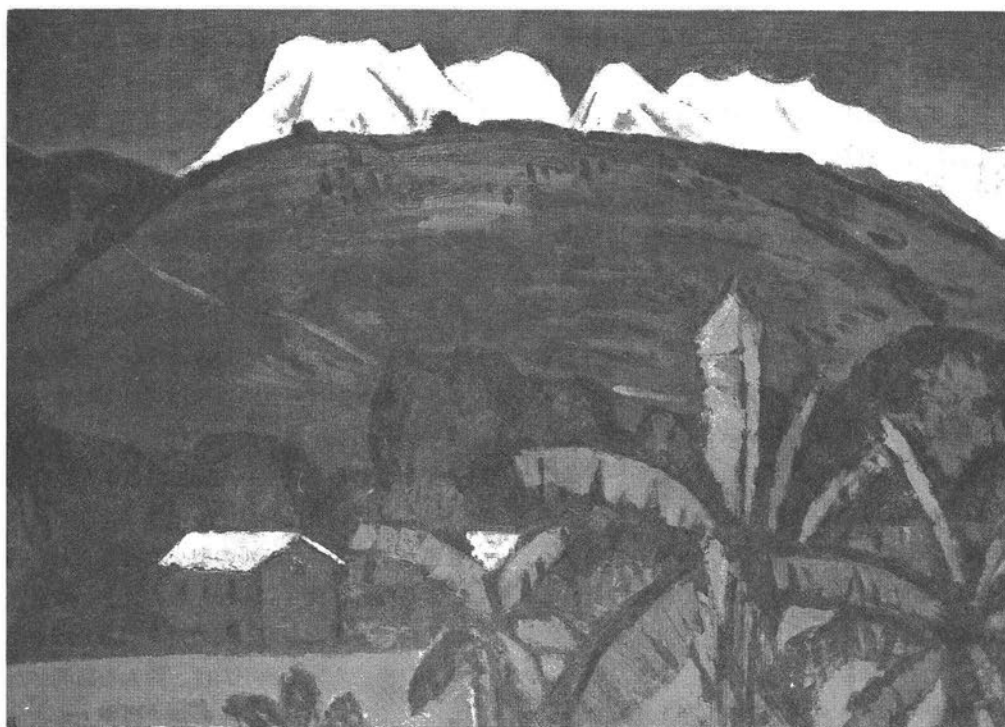
またヒマラヤ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先〒160 東京都新宿区高田馬場3-231-1 淀橋食糧ビル506

日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

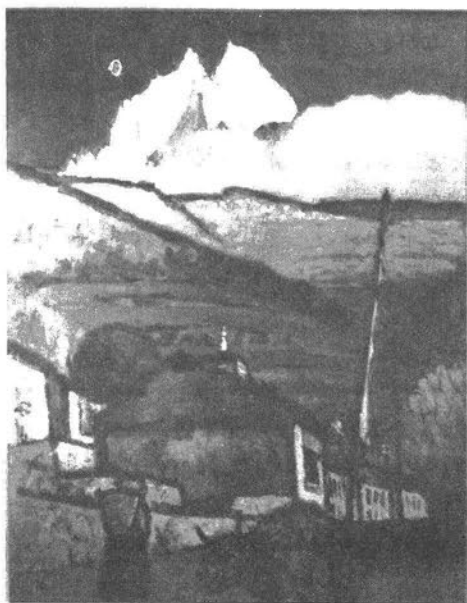
藤江幾太郎ネパール油絵展から



▲ネパール風景A（60号）、ポカラ

◀ヒマラヤの山村（60号）、ナムチェバザール

▼ヒマラヤの街（50号）、ポカラ



前号のニュース欄で紹介した、藤江画伯のネパール油絵展のスナップを並べてみました。カラーでないのが残念です。

なお藤江画伯の画集が、山と溪谷社から刊行されております。



▲会場での藤江画伯

1980.7.1~7. 銀座アートホール

トレッキング許可で登れる

山



6630m チュルー西峰

▲BC付近より見たチュルー西峰

片岡 邦夫

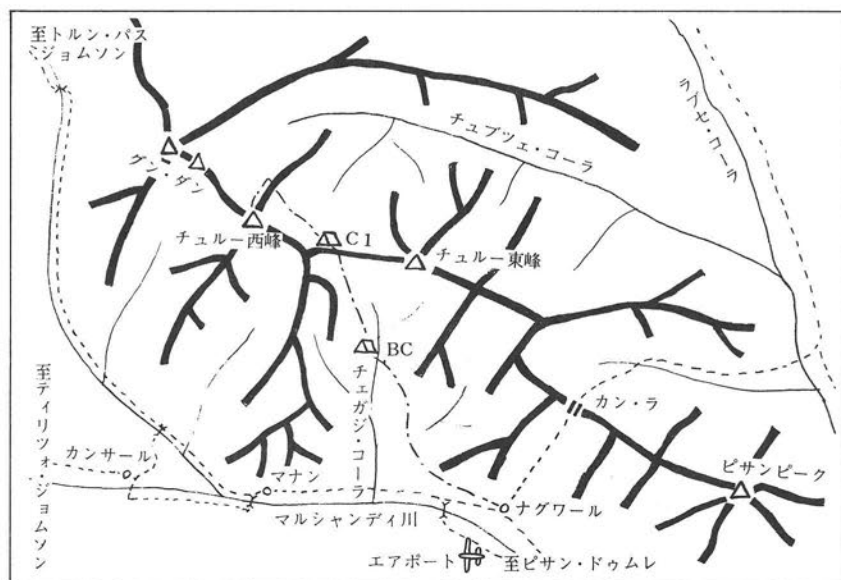
一般に『トレッキングの許可で登れる』とされる山が、ネパールには18座ある。ネパール山岳協会(NMA)の許可で登れる山のことで、詳しくは本誌102号13ページの『NMA登山規則』を参照願いたい。これらの山々は出発前のめんどろな手続も不要で、現地へ行ってから申請すればよく、登山料も比較的安い。ため近年急速に人気が出てきている。しかし、いかに小さな山とはいえ、ヒマラヤ登山であることに変わりはなく、事前準備や山に対する心がまえなどはしっかりとしたいものだ。単なる山麓トレッキングの延長ぐらゐに考えて人山し、事故を起しているパーティーも少なくないのである。

本誌では、今月より毎回順を追って『トレッキングで登れる山』の登山記録を紹介していくことにした。計画にあたって少しでもお役に立てれば幸いである。なお、末尾に執筆者の連絡先を付したので、さらに詳細を知りたい方は、直接本人に問いあわせてもらいたい。

チュルー西峰はトレッキング許可で登れる山のなかでは最高峰であり、1952年10月23日、今西錦司一行がアンナプルナIV峰登山の後に登った山として知られているが、学研の山岳地図集成の説明によると、登ったのはたぶん5,880m峰ではないかとしている。地元の人々の説明では、6,400m峰がチュルーだと云っていたが、もしかするとあの辺の山を全部チュルーと言うのかも知れない。チュルー西峰はNMAのレギュレーションによる

と、標高6,630mとなっているが、学研の地図では6,400mと記載されている。また同東峰もNMAでは6,200mだが、学研地図では6,059mとされている。高度計を持たずに登った私としては、何とも判断し難いところである。

この山はアンナプルナ山群の北側、マナン盆地の北に位置しており、アンナプルナ山群とベリ・ヒマールの間にあり、同じ山群中にはグンダンやピサンピークがある。我々は1979年10月28



より流れ出る川(チュエガジコーラ)に下り、この左岸を登る。途中2ヶ所程カルカもあり、ビャクシンの中の道はかなりはっきりしている。うしろには、アンナブルナII、IV、ガンガブルナが迫って来て迫力満点である。二股を左に行き、イグルーのようなカルカのある所から小さなビャクシンや草の急

日に東面より立正大のOBの山崎氏と2名で西峰に登ることができた。地名等の詳細なメモもなく不完全な紹介しかできないことを最初にお断りしておきます。

■ アプローチ ■

現在ナガワールの村の対岸に飛行場が出来ているが、フライトは不定期であり、チャーターでもしない限り実用性は少ないと思われる。ジョムソン迄飛行機を利用して、トルンバス(5,416m)か、ティリツォ側の峠を越してマナシに下る方法だと、ジョムソンより3~4日の行程であろう。峠越えがトレーニングにもなり、よいと思われるが、11月以降だと雪を覚悟せねばならず、峠越え自体がアルパイトとなるだろう。マルジャンディコーラ添いにたどるルートは、ボカラからサガラ、パンジャン、バグルンパニを越してクディーに出てマルジャンディー添いに行くのと、カトマンズとボカラの途中のドゥムレの町よりマルジャンディーをたどるコースと2つあるが、日数的にはどちらも7~8日でナガワールに着け、大差はないようである。マナシ盆地へ入ってすぐピサンやナガワールの方へ左岸に行く道とほとんど川添いに行く道があるが、前者はナガワールへの登りがかなりきつい。マナシの古い王宮があったというナガワールの村から少し登り、大きいチョルテンのある村から一度、チュルやナルブーパス(カン・ラ)

登となり(2~3時間)、正面に見えていた大きな滝の上に左にトラバースして回り込む。BCは少し下り気味に行った氷河の舌端状の川原がいいと思われる。標高約5,100m、ナガワールより1日で1,400m程登った訳である。踏み跡は割としっかりしているが、ナガワールでポーターを雇った方がベターだと思われる。

■ ルート ■

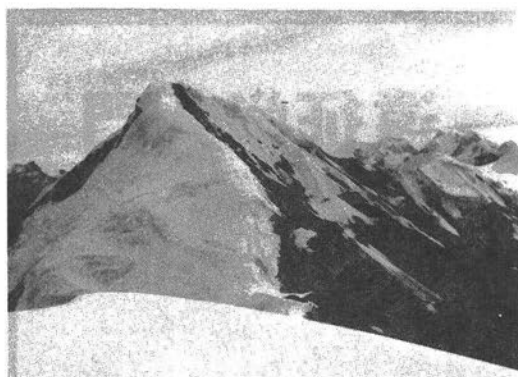
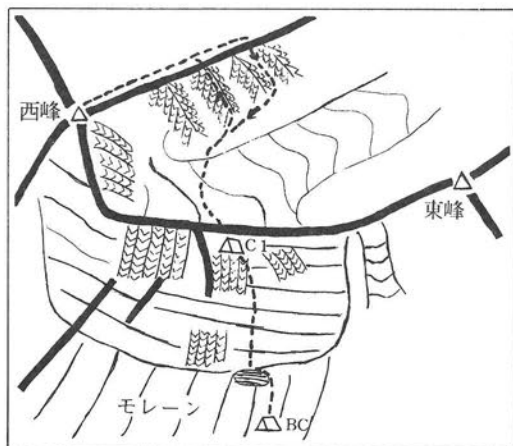
このBCからだ和西峰、東峰のどちらも狙う事が出来る。東峰の場合はナルブーパスの方からも可能だと思われるが、稜線に出てからが長くなる。BCより沢状の氷河の舌端部をつめ、雪のルンゼを登ってコル状の稜線に出る。(5,500m位か)ここにC1を出すことになるだろう。そこからは雪と氷の斜面であり、傾斜は5~60度位ありそうだが、2~3ヶ所クレバスが走っている他は問題はなさそうである。このルートだと全て雪と氷となり、ロックハーケン等は不要と思われる。

西峰は、BCから左手のモレーンを登り小さな氷河湖のあるあたりから、稜線目指して雪の斜面を登る。この辺はどこにルートを探っても問題ないが、稜線直下に2ヶ所岩の露出している所があり、その間を登り稜線に出る方がロスが少ない。ここに我々はC1を作ったが(5,800m位か)、出来ればもう少し上げた方がアタックの時、楽だと思われる。ここから北東方向に伸びた尾根との

間のカール状の雪原上を少し下り気味にトラバースして、北東方向へのびる稜線をめざす。稜線への登りは2～3本の尾根かルンゼの中にルートを探る。稜線の末端は、右側へ行く程易しそうに見えるが、その分トラバースする距離が長くなる。左から二番目位の尾根を登ったが、岩稜は2～3級の部分的に雪のついた岩登りだった。稜線に出てからは、頂上のように見えるいくつかのギャップを登ると、雪に被われた頂上に到達する。

帰りは登りに使った岩稜が悪そうだったので、易しそうに見えた尾根の末端部のルンゼを下降したが、ガラガラ状態で小さな滝もあり、気は抜けなかった。我々の時は天気が悪くガスっていて、頂上からのチベット側のパノラマはなかったが、アンナプルナ山群、マナスル山群、カングルーはすばらしかった。頂上では雷の為に滞電してしまい、フレームザックに当る背中部分がチクチク痛くなり急いで逃げてきた。C1より登り5～6時間、帰り5時間の行動であったが、かなりバテて月明りの中、「鹿がいる」とか「人が来る」とか言い出す始末だった。西峰から南に落ちている尾根を登るルートは(他のパーティーのトレースらしきものがあつたが)我々にはルートがすっきりして短い反面かなりの傾斜の雪と氷のリッジに見えた。西面からのルートも面白そうだが傾斜はけっこうきつそうに思えた。

我々はドゥムレよりナガワール迄7日間、BC迄1日、登はん3日という行動だった。2人共カラコルムで6,500 m以上の高度を経験した直後のことだったが、それでもきつい行動であり無理を



◀ C1よりのチュール東峰

感じた。BCより上の行動に5～6日は見ておくべきだと思う。アンナプルナー一周のトレッキングと組み合わせるのは理想だが、それだと休養も含めるとカトマンズ→カトマンズで1ヶ月以上の日程となる。

装備はカトマンズの道具屋から借用した物を使い、登はん具はφ8の40 mロープ1本、アイスバイル1本、ロックハーケン3本、アイスハーケン2本を用意したが、今回は全然ハーケン類は使わなかった。しかし、岩稜を下るとなれば、2～3回の懸垂も予想される。稜線に出るとヒドンクレバスもあり、ローピングは必要だろう。2人ともボロのシングル靴で行ったのだが、天候の悪かった事もあり、手足に軽い凍傷を負ってしまった。特に秋から冬にかけての時期は、ダブルの靴が理想である。シングルの靴の場合だとオーバーシューズは必要だろう。ドゥムレから入る場合、ドゥムレでもかなりの物資が揃えられるが、カトマンズで揃えた方がベターと思われる。

なお、グンダンをチュール西峰とし、6,400 m峰を東峰としている資料もあるが、私は6,400峰をチュール西峰とするほうが正しいと考えている。

(法政大学2部山岳部OB)

この欄へご投稿を！

「トレッキングで登れる山」に登られた方、ぜひこの欄に御投稿下さい。400字詰原稿用紙に横書きで7～8枚、地図、ルート図、写真3～4枚を添付して、H A J事務局の「ヒマラヤ」編集部宛にお願いします。

遠征学入門

XIIX

アプローチマーチについて

清水 澄

街での登山準備が終ると、いよいよ山に向けての行進である。交通の便の良い所なら乗物で麓まで行けるのであるが、遠征の対象となるような海外登山では何日間もの徒歩又はそれに準じた手段での旅行をしなくてはならない。ヒマラヤ登山ではこの山への接近の旅をキャラバンと呼んでいる。それは沢山の荷物を運んでの行進が、本来の隊商（キャラバン）の姿を連想させる為であろう。従ってアプローチ・マーチと呼ぶのが正式であるが、なじまれたキャラバンの方が一般的となっている。

キャラバンの仕方などという確立されたセオリーがある訳ではなく、隊荷、人員とも無事に山麓のベース・キャンプに送り込めば、目的は達せられるのである。しかし遠征の楽しさ、むづかしさの半分はこのキャラバンにあるので、遠征全般の中で相当に重要な部分となる。ヒマラヤでは長短の別はあっても、必ず徒歩による行進をしなくてはならないので、そのことを基本に話を進めなくてはなるまい。

どこから歩きはじめるか

勿論近代的交通機関、平たく言えば自動車の類が行ける所まではそれを利用するのが得策である。但しその終点が実質的なキャラバン出発点となる

ので、隊荷を運ぶポーターないし役畜を集められる場所でなくてはならない。急に行っても必要なだけの数は仲々集まらないので、先発隊を出すか、その土地の有力者に募集を依頼しておく。先発隊はシェルパ等が適当であるが、場合によっては隊員、リエゾン・オフィサー等も必要になる。遠征隊は通常この終点で、最低一泊はして隊荷輸送態勢を整えるのである。募集の難航が予想される時は、あらかじめ登山準備の都市か大きな集散地に人をやって募集をし、それを送り込む方法もとられる。それでも数が不足する時は、一方ではキャラバンをスタートさせながら、他方では近在の村落で員数を集める方法で、キャラバンを分割するしかない。

自動車道の終点が大きな町からいくばくもない所では町をキャラバンスタート地点とした方が何かと便利である。また終点があまりにも辺鄙な所の場合は止むを得ないので、中途の集散地をスタート地点としたい。自動車道はなくとも飛行機などが発着出来る場合は、これを利用した方が得策かどうか検討してみる必要がある。そこに行くまでのキャラバンと比較しての経費ばかりでなく、チャーター事情、フライトの確実性なども重要な要素である。天候待ちを何日もしたのでは速いものも速くなる。

いづれにしても、キャラバン出発地の事情は良く調査して、スムーズに進捗させたい。先に入った隊の体験は非常に参考になるものである。

隊荷輸送のポイント

キャラバン最大の目的は、隊荷の安全確実な輸送である。そこでポーターなり役畜の背に預けられる荷物の管理は重要な仕事である。荷物に一連番号をふり、それと同番号の札をポーターの首に掛けている風景は、遠征に興味を持たない人でも知っている程になじみ深いものとなっている。この様に番号札によって荷物と、ポーターを照合するのは重要なことである。しかし現在では一日雇いのポーターは少なくなって来て、ネパールでナイケと呼ばれるような、ポーターの頭目によって統制されるグループ・システムが一般的である。

50人程度を一つの組として、運搬の進行はナイ

ケがコントロールする。従って隊員ないしシェルパは朝に荷物を渡し、夕に受け取って個数を確認するのが大きな仕事となる。大きな遠征隊では夕刻の到着地で、受け取った荷物を集積するだけでも大変な仕事で、個数の確認でさえビタリ一致するのは珍らしい程に混雑を極める。しかし数が合わなくても、この毎日の仕事はやるべきで、夜間の管理を怠ってはならない。こうした場合、ポーターの番号札は最後の支払いの時に回収するので、平常は荷物と番号札とは番号は一致しなくなる。現在では番号札の必要性はあまりない様な気がするが、ポーター整理の便宜上、未だ使われている。

夕刻の到着地では、ポーターから受け取った荷物の損傷程度を絶えずチェックし、悪いものは補修しておく。雨中のキャラバンでは水漏れからの保護にも気を配らなくてはならない。盗難防止は夜間は勿論のこと、昼間でも心掛けるべきである。

キャラバン・ルートに通過危険箇所がある場合は、隊員は卒先してこれの通過を容易ならしめて、生命、物資の保全を計る。急流濁流の渡渉、丸木橋、崖、岩場等々である。

夜間の宿りについては、ポーターはそれぞれ個々で行うのであるが、身を寄せる物陰等容易に見出せない場所では、隊のテント、シートの類を貸出することも必要となる。奥地で困難な地帯では食料支給もあり得る。その他種々の困難に対し、隊は出来る限りの欲求に応じてやりたい。但し要求もないのに自発的に思いやりを多くするのは、一見人間的で美談のようだが、後から行く遠征隊を窮地に陥し入れることにもなるので心すべきである。

賃金の支払いには幾つかの方法が考えられる。番号札引き替え、荷物引き替えの他、5人程度の出生地別一括支払い、組合組織のポーターではナイケに一括支払いでも良い。困難の程度に応じての賞与は、隊の財政事情の許す範囲にとどめる。毎日タバコ2本等という心付けも一般に行なわれている。賃上げストその他のトラブルも起り易いが、誠意をもって当れば解決は見出せよう。

キャラバン用具の輸送

キャラバン中に使用する物資の幕営炊事具、食

料、個人装備、ルート工作用物品等は一般隊荷の中に混入するよりも、すぐ判別出来る様にしておく方が良い。従って輸送グループを専任の一团としたい。毎日使用する物であり、遅出、早着を要求されるので、それなりの力を持つポーターでなくてはならない。これはいづれの隊でも自然発生的に決るのであるが、毎日開閉することや、個人装備では機械類や貴重品も多いので、荷扱いを指導して損傷のない様にすることである。

隊員の行動

キャラバンは、基地への接近行動であるが、現地の珍らしい風物に接することの出来る時でもあり、シェルパ、ポーター、村人との交流親善の機会でもあるので、大いに楽しみたいものである。またこの期間は目的に向って体力を調整し、英気を養って、最良のコンディション作りをする時でもある。

日毎の宿泊地の決定は、サードー、コックなどが決める。従って何日で目的の基地（ベースキャンプ）まで着くかは、事前に彼らとよく話し合っておく必要がある。その場に臨んで隊員がキャラバンの進行を早めようと、宿泊地を先に延ばすことは、とかくトラブリやすい。

設営、撤収、炊事などはシェルパ等の仕事。隊荷、ポーターのコントロールは、サードー又はリエゾンが行う。彼等任せで良いのであるが、大筋は隊員が押え、必要に応じて自からも手を出す。

日中はなるべく雑事を忘れて四囲を楽しみ、写真、スケッチ等をものす。夜も時にはキャンプ・ファイヤーで親睦を計りたい。困難が起らなくとも3日に一度位はミーティングを行い、隊の現状を把握し、先のコースの確認をしよう。ミーティングには、リエゾン、サードーも出席させること。これは彼らに隊員との仲間意識を植えつけ、責任を自覚させる上で有効である。

さて、キャラバン中は隊員は疲れ過ぎない様に注意したい。特に高々度に向う登山であってみれば、高所順応に如何に身体の衰弱を防ぐかということも云えるので、その出発点となるキャラバンの終点に疲労を蓄積して到着したのでは話にならないのである。



NANDA KHAT

6611m

位置と山姿

ナンダ・カート (Nanda Khat 6,611m) は、ガルワール・ヒマラヤの東部ナンダ・デヴィ内院の東の障壁にある。ロングスタッフの科尔 (ナンダ・デヴィ・カル 5,910m) を隔てて北をナンダ・デヴィ東峰 (7,434m) に対し、南はパンワリドワール (6,663m)、東には有名なトレイル・パス (Traills Pass 5,312m) があり、ナンダ・コットに続く。

主稜からは壮大なナンダ・デヴィ内院を見下ろ

し、主峰 (7,816m) が眼前に巨大な姿をそびえたせ、遠くパンチ・チュリ山群および西ネパールの山々、チベットのカイラスが望める。

ナンダ・カートは、ガルワール・ヒマラヤの一方の核心部に位置しているのである。見る方角によって様々に姿を変えるが、ピンダリ側からはたおやかな雪峰であり、ロンワスタッフ・科尔方面からは鋭角の非対称頂稜が美しい。

登山史

初登頂は、1961年10月20日、P. チョウ

ダリーを隊長とするインド隊によってなされた。彼らはピンダリ氷河からトレイル・パスを経て主稜にとりつくルートをとった。

1970年、A.R.チャンディカールの率いるインド隊はピンダリ氷河上部で2名が遭難死し、登山を中止した。

アプローチ

ニューデリーをチャーターバスで早朝に出れば、その日遅くにはアルモラへ到着できる。アルモラは英国統治時代からの有名な避暑地で「花のアルモラ」と呼ばれるほど美しい高原の街である。かつて、立教大学隊（ナンダ・コット）もこの街からスタートした。

キャラバンはアルモラの先、カプコットから始まる。途中ダクリ峠（2,902m）を越えてピンダリ側に下り、ピンダリ氷河中部の4,200m地点のベース・キャンプまではほぼ5日である。

登はんルート

BCからピンダリ氷河上部プラトーを越えて、トレイル・パスに至り、東稜～P6477～北稜を経由して登頂する。前進キャンプ数＝3。

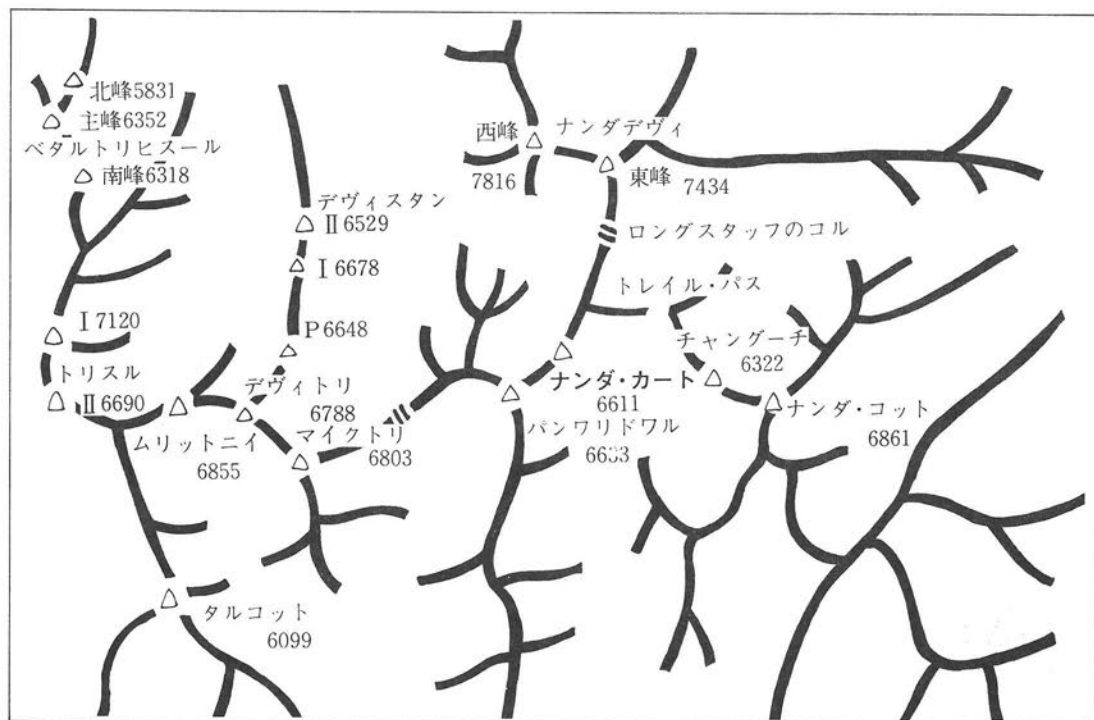
なお、順化不調者のために、トレイル・パスの東にそびえる未踏峰チャングーチ（Changuchi 6,322m）を第2目標とする。

日程（予定）

- 9月 4日 先発隊2名日本発
- 13日 本隊日本発
- 14日 ニューデリー発
- 21日 BC着（ピンダリ氷河4,100m）
～登山期間14日間～
- 10月 6日 BC発
- 12日 日本帰着

出発までの大まかな準備日程

- 1月中旬 申込金10万円払込み完了、身上書、診断書提出
- 2月下旬 エントリービザ（登山）申請
- 3月中旬 隊員顔合わせ。隊務分担決定……第一回合宿
- 5月上旬 富士山合宿……第2回合宿
- 6月上旬 低圧室入り（約6,000mまで）……第三回合宿
- 8月中旬 隊荷パッキング



事務局日誌 (8月)

- 1(金) 高所登山懇談会(於ルーム)重広、西郡、山森、菊地、角田
文部省へ法人設立許可申請書提出
- 4(月) 社団法人補充文書依頼(各理事他)
- 10(日) ガネッシュヒマールⅡ打合わせ(山森他)
- 11(月) ヒマラヤ106号発行
社団法人補充文書タイプ(～13日)
- 12(火) 年報広告依頼文書発送
- 16(土) 登山学校ケダルナート隊壮行会(ルーム)
- 17(日) 登山学校ケダルナート隊梱包作業(～18日)
- 18(月) H.C.サリーン氏へ日程連絡
- 20(水) M.S.コーリー氏及びサリーン氏来日について協議(エア・インディア)
事務局会議(稲田、山森、角田)
- 23(土) 登山学校ケダルナート隊リーダー会議(尾形、山田、角田)
- 28(木) 東京集会(ルーム、講師 野田衛氏)
M.S.コーリー氏来日について協議(A.I)

*** 寸 感 ***

★先日ある女性ばかりの登山隊の壮行会に行ってきました。隊の中で唯一人ヒマラヤ登山の経験を持つ隊長サンは、H A J 登山学校の卒業生です。そういえば、今年のキャシードラル隊のTさんも自分の会で今秋ガネッシュIへ行かれるとか。登山学校の運営理念が理想的に実を結んでいる例だと思います。もちろん本質的にはH A J 云々よりも本人の地道な努力のほうが、より重要な下地なのでしょうが、でもささやかなりともH A J が彼や彼女の役に立ったことは事実のようです。その壮行会、とてもさわやかな一夕でした。（つ）

ヒマラヤNo.107 (10月号)

昭和55年9月10日印刷 55年10月1日発行

發行人 柴田金之助

編 集 人 角 田 不 二

発 行 所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506

郵便振替 東京 0-48954 「日本ヒマラヤ協会」

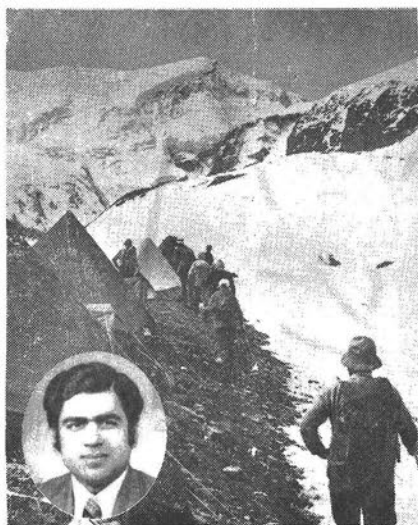
Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“魅惑の
インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！

当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers, 26

barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK Cable SHIKHE IKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤへの装備



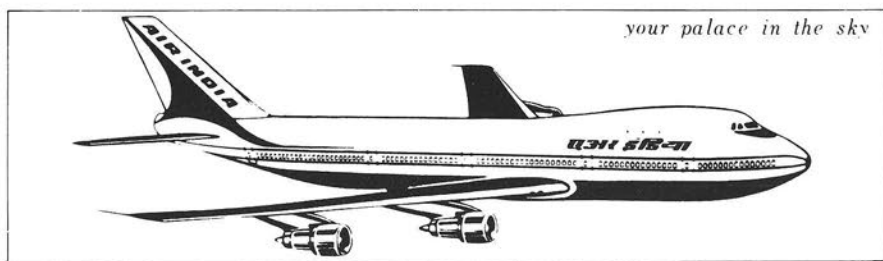
◎遠征隊の装備、相談にのります。



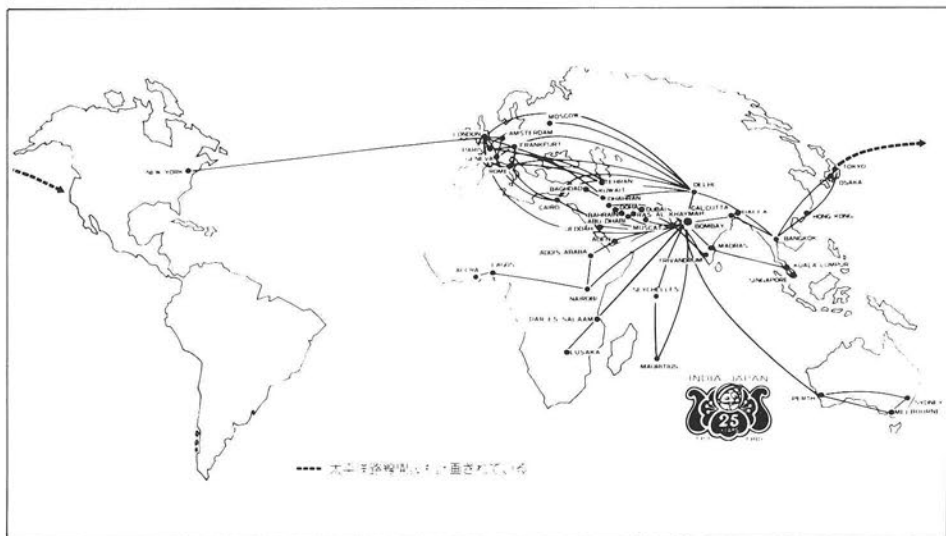
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2-123 ☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2-19-10東和ビル内 ☎03 (200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の耕井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7 35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052) 583-0747

世界の43都市をネットする
エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横浜●中区常盤1 2 関内日本ビル	〒231☎045 651 2874
大阪●東区備後町松豊ビル	〒541☎06 264 1781
神戸●葺合区布引2-1-3 新布引ビル	〒651☎078 222 1919
福岡●博多区博多駅前1 3 21八重州ビル	〒812☎092 471 7172